別れの朝

マンションのリビングに差し込む晩秋の朝陽が、動かない私の顔をも照らしている。妻と二人で懸命に働いて購入したこの２ＬＤＫのマンションに、小さな幸せは確かにあった。子どもはいなくとも、二人の平坦でささやかな幸福はあった。

妻がいつもの、そして今日で最後の珈琲を運んでくる。私の前に置かれた珈琲カップ。新婚旅行のあのストックホルムで買ったそのペアカップの、私好みの極熱の珈琲から立ち上る湯気が私の視界をかすかに揺らめかせる。

薄化粧の妻の顔は柔らかな朝陽に美しい。夫婦だった頃よりも美しく思える。明日からの新しい暮らしへの期待と後ろめたさの綯い交ぜが生む霞のようなものが、ほの暗くはない、ほの明るい翳りが、その知的で整った顔立ちの魅力をさらに深めている。自分のカップを手に私の顔を見詰める妻の視線は、私の目を通り越している。遠い何かを視ているようだ。昔と現在の自分を視ているのかも知れない。

「…忘れないから…」

妻は独り言に似て、懺悔にも似て、低くささやく。そして私の前に立ったまま、思い出のカップで珈琲をゆっくりと含む。その顔を無言で見守る私は、全てを受け容れている。

狭い室内に作業服姿の男たちがきびきびと立ち働いている。あらゆる物が手早くまとめられ、運び出されてゆく。妻はカップを手にしたまま、キッチンに戻り、食器類を梱包する男たちに指示を出している。そうした光景を私はただ眺めるだけだ。

この愛の巣を作った時に、二人で笑いさざめきながら荷を開けたのが昨日のことのようだ。あれは、先を知らぬ、若い幸せな春の朝だった。時は移ろい、同じ部屋で今はその逆の作業が行われている。これがこの世というものなのだ。彼女と共有した愉しかりし日々、幾多の思い出のシーンの様々なアングルが走馬灯のように消え浮かぶ。

梱包作業を終えた引越し業者のリーダーが妻に声をかけた。

「奥さん、もうこれでいいですか？」

「はい、ありがとうございます。あとは全部処分しますので」

業者と入れ替わりに一人の男がリビングに姿を見せた。これまでこの男が来る夜は、私はいつも、いや応なしに壁の方を向かされていた。見えるのは白い壁だけだった。いま初めてまともに顔を見るその男が、弾んだ声で妻に呼びかけた。

「さあ、あとはゴミを出せばおしまいだな！」

「そうね…」

妻はまた私の前に立った。その手が伸び、私のカップが下げられた。二つのカップがゴミ袋に入れられるのを私は視野の片隅で見ていた。次に彼女の手は私の眼前に伸びた。

その手で私は写真立てごと持ち上げられ、新聞紙で包まれた。視界を真っ暗に塞がれた私が収まったのは、カップと同じゴミ袋らしい。

妻と新しい夫は明日に向って出てゆく。私も出てゆく。何処へ行けばいいのか？